

二〇一六年度 一般入試C日程

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は30ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(60分 100点 (解答番号

1

46

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

ショウゴは暗闇の中で目を覚ました。

最初のうちは、自分のそれまで眠っていた場所が深い穴の中、たとえば、洞窟の陽の光も差し込まぬような奥の方といったところだと思っていたのだが、やがて頭が冴えてくるにつれて、どうもそうではなさそうだと気付きはじめた。

頭が冴える、あるいは何かに気付くといっても、それは状況をきちんと判断分析する能力を発揮したという意味合いのものはなかった。ただ闇雲に、情報⁽¹⁾を収集しただしたというほどにすぎなかった。

「ここはどうも穴の中ではないらしい、何故なら」と、ショウゴは考えた。「土の匂いがしない。岩の匂いもしない。洞窟につきものの苔^{こけ}の匂いも水の匂いもしない。それどころか、何の匂いもしない場所ではないか」

そのことに気付いて、ショウゴは急に恐怖に駆られた。匂いがしないということは、ショウゴにとって入手し得る情報の八割がたを断たれたことを意味する。

嗅覚こそは、ショウゴにとって最も頼りになる味方であった。聴覚にも少なからず自信はあったけれど、匂いに較べれば、音が伝えてくれる情報は、十分の一以下の不確かさであることも知っていた。まして視覚は、ほとんどといって良いほどアテにならなかった。第一、ショウゴには、明暗濃淡の知覚はあっても、色彩というものを読み取る能力は無かった。

「これは困ったことになった」

いつの間にか、尻尾^{しっぽ}が股ぐらに入りこんでくる感触を味わいながら、犬であるショウゴはそう思った。

「これでは一体、どうやって情報を収集し、身を守ったり餌を手に入れたり敵を攻撃したりすればよいのだ」

暗闇の中で考えながら、シヨウゴは心底怯えていた。そのとき、ふいに誰かが声をかけたような気がして、反射的に耳をピクリと動かし、同時に鼻孔をヒクヒクと開閉した。が、周囲には何の気配も感じられなかった。それにもかかわらず、また誰かが声をかけた。シヨウゴはキョトンとした表情をして首を少し横に傾げた。前脚を揃えて耳の先端を立て気味にし、やや頭を斜めに傾けたその姿勢は、シヨウゴが西洋種の犬であれば、ヒズ・マスターズ・ヴォイス、⁽²⁾即ちビクターのシヨウヒヨウのように見えたとかもしれないが、あいにく彼は柴犬の雑種であったから、さしてサマにもならず、ただ当惑しているだけの姿であった。

また、声が聞こえた。

シヨウゴは姿勢を低くし、⁽³⁾周囲に向かって「グルルル」と唸った。

「シヨウゴ、シヨウゴ、そんなに牙を剥いて唸るものではない」

声がそう言った。そのときになって、シヨウゴはやっと、声が耳に聞こえているのではなく、頭の中に直接響いてきていることに気が付いた。おまけに、その声の言っている内容は、犬に向けて人間が語る言葉よりもはるかにハッキリと理解出来た。

「お前は誰だ、何処にいる」

そうシヨウゴは吠いたのだけれど、実際には「ウウウ、グルルルウ」という唸り声が喉から洩れただけであった。

「シヨウゴよ、私は神様だ」と、頭の中の声が言った。不思議なことに、シヨウゴのボキャブラリーの中には存在していなかった筈の、⁽⁴⁾「神様」という言葉の意味が、ちゃんと伝わってきた。もともとそれは、犬よりも偉く、たぶん人間よりも少しばかり偉いボスのような存在⁽⁵⁾といった認識のレベルに止どまっていたのではあるが。

「神様が俺に何の用だ」と、シヨウゴは、秋田犬やドーベルマンと出会ったときのヨウリヨウの声で言った。一応控え目ではあるが、⁽⁵⁾けしてまだフクジュウしたわけではないぞ、というニュアンスの声だった。

「シヨウゴ、お前は死んだのだよ」

それを聞いて、⁽⁶⁾シヨウゴの頭の中は、一瞬にして真白になった。犬といえども、死というのがどういふことかは知っていたからだ。保健所に捕らえられ、⁽⁷⁾動物アイゴ施設のどうのといった名称をつけられたコンクリート製の建物に送り込まれた犬や、あ

るいは猫たちは、自分の将来がどういふものであるかを、数日のうちに悟る。電気ショック、さもなければガスによって死に至らしめられるということは、誰が告げる訳でもないのに、何故だか判るのだ。それは、言ってみれば、古来、多くの人間が死に對する準備として宗教というものを求めるようになった経過よりも、より直接的に神界靈界からの啓示⁽⁸⁾を受ける、動物的本能によるものかもしれない。その意味では、耐久年度を過ぎてしまっている、古くさい宗教をこねくりまわさねば死を迎える覚悟が持てない人間よりは、⁽¹⁰⁾犬の方が真理を熟知しているといえなくもなかった。ただ、惜しむらくは、犬は死に對する明確な自覚を持つていたとしても、死後の世界への具体的イメージを生前から抱けるほどのイメージが欠如していたということに問題があった。

だから、ショウゴは、神様に自分が死んだと告げられて、とても驚いた。

しかし、思い返してみれば、やはり自分は死んだようであった。鎖で繋がれればなしであった何年かの生活から、やつとの思いで足で留め金のフックを押さえて外すことを学習して脱出した途端に、表通りへ数メートル駆け出しただけで、通りかかった自動車にはねられてしまったのだ。ポウン、と、体が宙に浮いた感触はいまでも覚えていた。そして痛みを感じた覚えは無いけれど、自分の体が堅いコンクリートに叩きつけられ、四肢がバラバラになっていく気分だけは、思い返してみれば五体の各器官が記憶している。最初に車のバンパーに激突した右の前脚は、いまでもショックで麻痺^{まひ}しているように思える。

「俺は、死んだのかね」と、ショウゴは言った。もう、喉を動かして声にすると、この作業は行わなかった。思いを、頭の中に言葉にして浮かべるだけで充分に相手に伝わるのだと知ったからだだった。

「ああ、死んだのだよ。地上の時間にして六年と二ヵ月。ま、犬であるお前にはそういう表現をしても判らんだろうが、つまるところ、雌が欲しくて欲しくて堪らんようになる季節を六回ほど体験したほどの時間、今回は生きたということだ」

「今回？」と、ショウゴは、⁽¹¹⁾またビクター犬の表情となった。「今回つてのは、どういう意味だ。俺が考えて判る今回つてのは、飼い主の人間が散歩に連れてつてくれたときに、ああ、今回は前の回よりもハスキーの小便の臭いが薄れたな、とか、今回は公園に人間の子供が多いから自由に走り回らせてはもらえないだろうなとか、そういうことだが、あんたが言う今回つてのは、⁽¹²⁾そ

の手の散歩の状況と同じような意味なのかね」

「ま、お前の認識ではその程度だろうな」と神様は言った。「本当はね、お前は何度も犬としての生涯を体験しているということなのだがね」

「判らねえ」

と言ったつもりだったが、動揺が言葉になって、ショウゴはまた「グルルル」と声を出して唸っていた。

「ま、いいさ。⁽¹³⁾おいおい判ることになるだろう。さて、お前は車にはねられて死んでから、地上の時間にして三週間ほど眠っていたのだが、いまこうして目覚めたのだ。もうすぐ、行くべき世界へ案内する者が現れるから、素直にその者に従うのだよ」

「グルルル」とショウゴはまた唸った。今回は犬歯を歯茎まで剥き出して、怒りすら見せての唸りだった。自分をはねた自動車への怒りもあつたし、今回の前回のと訳の判らないことを言う神様への怒りもこめられていた。

「ほらほら、そのように牙を剥いて醜い姿をさらすものではない。それでは、くれぐれも迎える者に素直に従うようにね」

そういう声が頭の中にエコーを残して響き、突然に言葉の主である存在が消えた。代わりに、⁽¹⁴⁾シッコクの闇であつた筈の周囲の世界に、ポワツとおぼろげな光がさした。光は、ショウゴのいる位置の前方から投げかけられているように思えた。本当は、その光は様々な色相を順次に見せていたのだが、悲しいかな、色を識別する機能を持たない犬であるショウゴには、最終の段階に至るまでは、その色彩の変化は理解出来なかつた。

客観的に見れば、最初の色は強い紺青の輝きであつた。が、あまりの光の強さに、ショウゴはとてもそれを正視出来ず、身をすくめているだけだった。次に現れたのは、これも目映い^{まばゆ}輝きを持つ白い光であつた。ショウゴは頭を低くして、その光を避けた。三番目に、光は黄色あるいは黄金の色へと変化した。これまたショウゴの虹彩^{こうさい}でキャッチするには強烈すぎて、思わず「クシャン」と大きくくしゃみをしてしまった。その次は赤色光であつた。色は判らぬながら、その赤い光にはショウゴは引かれるものがあつただけけれど、心の中に「いやいや、あれは危ないぞ」と告げる何者かがいて、光の中に進むことはせず、その場に止まつた。緑色の光がショウゴの体を明るく照らし出したときも、ただ「クーン」と仔犬^{こいぬ}のような鳴き声を出しただけで歩み

寄ろうとはしなかった。そして最後に、いままでの五つの色、五つの光が入り混じったカクテル光線のような強い光明が、ショウゴのいる空間を駆けめぐった。紺青、白、黄、赤、そして鮮やかな緑の光が、めくるめくような力⁽¹⁵⁾でショウゴの体を照らしたのだけれど、この柴犬の雑種は、ただひたすら、顔を前脚で覆い、そこには存在しない土の中に鼻面を埋めようと努力しつつ、光の照射を避けつづけた。

やがて、その明度が弱まってきた。光源に触れば肌を焼かんばかりの強さであった光が、徐々に薄ぼんやりとしたものとなっていく、そして光の色もそれにつれて鈍い緑色へと変化していった。

それは、ショウゴの知っている、近所の公園の人工的な芝生の色に近いものであるように思われた。光の強さに、もう対応出来ると感じて、ショウゴはその鈍い緑色の光源に向かって駆け出して行った。

(景山民夫「犬と神様」による)

(注) ヒズ・マスターズ・ヴォイス——亡き飼い主の声を再生する蓄音機に聞き入っている首を傾げた犬を描いた絵。音響機器

メーカーのビクター(現・JVCケンウッド)のマークとして使われている

問1 傍線番号(1)・(8)・(9)・(13)・(15)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

つ選びマークしなさい。

1

く

5

(1) 闇雲に

1

- ① あきらめきれずに
- ② 心が晴れないまま
- ③ やつとのこと
- ④ むやみやたらに
- ⑤ 無駄を承知で

(8) 啓示

2

- ① 真理をあらわし示すこと
- ② 見通しの明るい情報のこと
- ③ 絶対に逆らえない指示のこと
- ④ 一方的に方針を押しつけること
- ⑤ 疑問に答えが与えられること

(9) こねくりまわさねば

3

- ① 見つけ出してこなければ
- ② あれこれ考えてやってみなければ
- ③ じつくりと研究してみなければ
- ④ いろんな宗教を試してみなければ
- ⑤ 自分に合わせて作りかえてみなければ

(13)

おいおい

4

- ① 身にしみて
- ② 遠い未来には
- ③ はつきりと
- ④ いやでも
- ⑤ だんだんに

(15)

めくるめくような

5

- ① ぞっとするような
- ② 怒りで震えるような
- ③ めまいがするような
- ④ 体を貫くような
- ⑤ 包みこむような

問2 傍線番号(2)・(4)・(5)・(7)・(14)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6
10

(2) ショウヒヨウ

6

- ① 敵のヒヨウテキになる
- ② 無人島にヒヨウチャクする
- ③ 長年の疑問がヒヨウカイする
- ④ 不在者トウヒヨウをする
- ⑤ 同じドヒヨウで戦う

(4) ヨウリヨウ

7

- ① 高校の課程をシュウリヨウする
- ② 会社の金をオウリヨウする
- ③ 赤いトリヨウを買う
- ④ 会社のドウリヨウと会う
- ⑤ 意識はメイリヨウだ

(5) フクジュウ

8

- ① あれこれフクアンを練る
- ② 会話が事件のフクセンとなる
- ③ 食後に薬をフクヨウする
- ④ 掛け軸がニフクある
- ⑤ 戦地からフクインする

(7) アイゴ

9

- ① ソウゴの理解を深める
- ② 太陽がシゴ線を通過する
- ③ グラク映画を鑑賞する
- ④ ゴエツ同舟の人間関係
- ⑤ 被告人をベンゴする

(14) シツコク

10

- ① 部下をシツセキする
- ② 自動車がシツソウする
- ③ 名外科医がシツトウする
- ④ シツキのお椀を使う
- ⑤ シツト心にかられる

問3 傍線番号(3)「周囲に向かって『グルグル』と唸った」とあるが、このときの「ショウゴ」の様子の説明として最も適切

なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

11

- ① 急に暗闇の世界に放り出され自分の位置がわからないので、恐怖に怯えて我を失ってしまっている
- ② 何の匂いもしない世界では情報収集が思うようにできず、唸り声の反射音を使おうとしている
- ③ 誰かに声をかけられたような気がしたが、何の気配も感じられないので周囲をさらに警戒している
- ④ 嗅覚が頼りにならず、聴覚の情報集めもうまくいかないなので、やつ当たりしている
- ⑤ 頭に響いてきた声の主が神様だと思えず、どこかに侵入者がいると思つて威嚇をしている

問4 傍線番号(6)「ショウゴの頭の中は、一瞬にして真白になった」とあるが、このときの「ショウゴ」の心情の説明として最

も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 神様が自分を勝手に死後の世界へ送ったことに強い怒りを覚え、何も考えられなくなっている
- ② 保健所に捕まってもいないのに自分が死んだことを知って、理不尽に思っている
- ③ イメージのなかった死後の世界に、今自分がいると聞かされると驚いている
- ④ せっかく鎖から自由になったのにすぐに死んだことをひどく悲しんでいる
- ⑤ 自分に電気ショックやガスが使われていたのだと思い、恐怖で何も考えられなくなっている

問5 傍線番号10「犬の方が真理を熟知しているといえなくもなかった」とあるが、なぜか。その説明として最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 多くの人間は死に備えるために宗教を用いてきたが、犬はより直接的に死の自覚を持つことができるから
- ② 人間は一般に犬を死に追いやる存在であり、犬はいつ保健所に送られて死ぬかわからないと知っているから
- ③ 人間は死後の世界を目で見ようとするが、犬は死後の世界を優れた聴覚で直接体験できるから
- ④ ほとんどの人間は視覚から情報を入手するが、犬はより本能的な感覚である嗅覚によって得るから
- ⑤ 人間よりも犬のほうが聴覚がすぐれ、神様の声を明瞭かつ正確に聞き分けることができるから

問6 傍線番号11「またピクター犬の表情となった」とあるが、なぜか。この説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中か

ら一つ選びマークしなさい。

14

- ① 生前、飼い主と散歩に出かけたときのことを懐かしく思い出したため
- ② 神様の声が聞こえてくる方向を探りあてようとして、あわてていたため
- ③ 六年と二ヵ月という地上の時間がどれくらいか判断しようとしていたため
- ④ 頭の中に言葉を思い浮かべるだけで飼い主の声が聞こえてくることに戸惑いを感じたため
- ⑤ 神様から告げられた話に、それまで理解していた世界とそぐわない内容が含まれていたため

問7 傍線番号(12)「その手の散歩の状況と同じような意味」とあるが、この説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から

一つ選びマークしなさい。

15

- ① 何度おこなっても失望を味わうはめになるのがわかっていること
- ② 嗅覚や視覚によって周囲の状況をそのたびごとに探る必要があること
- ③ 他者によって不快な思いや不自由を強いられる状態にあること
- ④ 少しずつ異なっている場面が何度も繰り返されること
- ⑤ 自由に走り回っているつもりでも実際には誰かの管理下にあること

問8 本文中からうかがえる「ショウゴ」の性格や特徴の説明として、あてはまらないものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 自分の鋭敏な感覚が最大限に生かせない状況下にあっても、まず周囲の情報を収集しようとする用心深さがある
- ② 人間や自分より強いものに対してはこびへつらう態度を取りがちであるが、未知の状況に臆さない勇猛さを持つ
- ③ 突然神様に死を告げられるといった驚くべき状況にあっても、比較的冷静さを保ちつつ行動することができる
- ④ 暗闇や嗅覚の利かない状況に置かれても、自分が置かれた状況に冷静に順応しようとすることができる
- ⑤ 小心とまでは言えないものの、周囲の状況が把握できるまでは慎重に行動しようと心がける繊細さも備えている

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① ショウゴは、生と死のサイクルに怯えており、神様の言葉を受け入れたくなかった
- ② ショウゴは宗教を持つことなしに、頭の中で神様と会話することができた
- ③ ショウゴは感覚が鋭敏なので、暗闇でも視覚によって死後の世界に対処することができた
- ④ 車にはねられて死んだのに、ショウゴは強い緑色の光の中で公園に向かって走り出してしまった
- ⑤ ショウゴは、突然響いてきた不思議な声の主が神様なのか、飼い主なのかわからなかった

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

不確かなものについては判断を保留するという態度は懐疑主義⁽¹⁾(他の分野の懐疑主義と区別する場合には哲学的懐疑主義)という名前で知られ、懐疑主義をどうやって乗り越えるかというのが多くの哲学者の生涯のテーマとなってきた。

クリティカルシンキングという考え方もそうした伝統の中から生まれてきたものである。もう少し広くいえば、論理学という分野が発展してきたのも、絶対に間違ふことのない推論とはどういうものか、という関心があつたからこそであろう。そして、こうした問題意識が科学やその他の知識の本質について理解を深めるうえで重要な役割を果たしてきたことも事実である。

しかし、それと同時に、哲学的懐疑主義は非常に破壊力があり、これを下手に素直に受け止めると、改築どころか、日常生活も科学の営みも何一つ残さず更地にしてしまいかねない。こうした哲学的懐疑主義の破壊力⁽²⁾を抑えながらも、そのいいところを生かしていくにはどうしたらいいか、角を矯めて懐疑主義の牛を殺してしまわないようにする⁽³⁾にはどうしたらいいか、を考えていく。

まず、哲学的懐疑主義とはどういうものかを理解するために、「我思う、ゆえに我あり」で有名な一六世紀フランスの哲学者デカルトの議論とその現代版を見ておこう。彼は今の学問の分類法でいえば数学・物理学・天文学などにあたる分野でも重要な研究を行っているので、「哲学者」⁽⁴⁾とレッテルをはるのは実はデカルトに対して失礼な面もある。しかし、当時はすべて「自然哲学」としてひとくくりになされ、分野の区分はそれほど明確に意識されていなかった。

よく誤解されるところだが、デカルト自身は懐疑主義者ではなく、むしろさまざまな問題について確実な知識が存在すると考えていた。彼のこの問題についての名著『省察』は哲学業界用語もほとんど使われず、わかりやすい言葉で書かれている。

さて、デカルトは正しいかどうかはつきりしない主張が知識としてまかり通つている状態に疑問を感じ、絶対確実な基礎の上に知識を確立しなくてはならないと考えた。これは、言い換えれば「絶対確実」という強い条件の下での、究極の改築型クリティカルシンキングのセンゲン⁽⁶⁾である。そのための方法としてデカルトが提案したのが方法的懐疑、すなわち疑いうるものについて

はすべていったん判断を停止して、絶対確実に真だとわかるものだけを受け入れるというやり方である。

方法的懷疑とは、たとえていえば、冷蔵庫の中の野菜が腐っているかどうか確かめるのに、いったんすべて冷蔵庫の外に出し、一つひとつ吟味して、腐っていないという確証の得られた野菜だけ冷蔵庫に戻す、という手法である。腐っているか腐っていないかよくわからないものは冷蔵庫には戻さない。たとえば外から見ると大丈夫だが中だけ腐っているかもしれないタマネギなどがこのカテゴリーに属するだろう。どうしても戻したければ、切ってみるなりなんなりして中身を確かめてからということになるだろう。

デカルトが吟味の対象としたのはわれわれの信念である。信念といっても哲学でいう信念は日常語の信念とはだいぶニュアンスが違い、われわれが思っていることはすべて信念と呼ばれる。たとえば「今日は月曜日である」という信念を持っている」というと日常的には非常に奇妙だが、哲学的にはこういうものも信念と呼ぶ。本書では「主張」をクリティカルシンキングの対象としてきたが、主張との関係で考えると、主張を信じることで得られる心理状態がこの意味での信念であり、この意味での信念を公に述べたものが主張である。つまり、主張と信念は表裏一体の関係にある。

さて、こうした信念と冷蔵庫の野菜には一つ大きな違いがある。それは、信念には、前提となる信念から別の信念が導き出されるという関係が存在することである。ということは、前提が間違っていれば結論となる信念も受け入れられない、という

(9)

が存在することになる。そのため、基底にある信念が一つこけると後がすべてこけてしまうという大変な事態に⁽¹⁰⁾オチイ⁽¹¹⁾る。ただ、デカルトは日常生活においては不確かな知識にもとづいて行動せざるをえないことがあるのは認めている。方法的懷疑は日常生活とは別の文脈で実践される作業だったということは確認しておきたい。

デカルトは『省察』の第一章で、方法的懷疑を

(12)

に実践してみせる。その結果、絶対確実に真だとわかるものなど非

常に少ないことが明らかになってくる。伝聞で得た知識には間違いや嘘の可能性がついてまわる。では自分が目の前で見たものについてはどうだろう。デカルトの使う例でいうと、今わたしは自分の部屋で椅子に座ってストーブの前で手に持った紙きれを見ている。しかし、この紙切れを自分が見ているという信念は絶対確実に真だろうか。

確かに紙切れは目にも見えるし手で触れることもできるけれども、幻覚やサツカク⁽¹³⁾というものも存在する。また、もしかしたらそもそもストーブの前に座っているということ自体が思い込みで、実は夢を見ているのかもしれない。夢の中では現実⁽¹⁴⁾に起こりうることはたいてい起こるし、しかも夢を見ているということに気づくことはまずない。

しかし、もしかしたら夢の中にいることを確かめる方法や、逆に起きているときに起きていることを確かめる方法がないとも限らない。そこでデカルトはより極端な可能性を想像する。それが有名なデーモンの仮説である。

われわれの目に見えるもの、われわれが考えることも、すべて神のような強力な力を持つ悪霊（デーモン）⁽¹⁵⁾がわれわれをたぶらかしているだけなのかもしれない。目の前にリンゴがあるという視覚的な体験も、そのリンゴに触るという触覚的な体験も、そのリンゴをかじるとリンゴの歯ごたえがありリンゴの味がするという体験も、リンゴを食べるために手を動かしているという感覚も、すべてデーモンが巧妙にしくんだ幻覚かもしれない。

この想定は、見たり触ったりといった感覚によって得られる情報だけでなく、論理学の証明や数学の証明についての懐疑にも拡張できる。極端にいえば、「 $2+3=5$ である」といった単純な計算ですら、デーモンがわれわれの頭を混乱させてつねに計算間違いするようにしむけた結果、そう思っているだけなのかもしれない。こう考えると、絶対確実に真だといえるものなど、この世には存在しないように思えてくる。これがデーモン仮説である。

デーモン仮説はちよつと古くさいと思う人には、「水槽脳仮説」というバリエーションもある。これは、あなたは実はバイヨウ液に満たされた水槽の中の脳だが、神経系がコンピュータにつながれて、コンピュータの作り出す非常に⁽¹⁷⁾セイミョウなバーチャルリアリティの世界を見せられているのだ、という仮説である。感覚神経への入力と運動神経からの出力がうまく一致させられているために、あなたはそれがバーチャルリアリティだと気づかない。

（伊勢田哲治『哲学思考トレーニング』による）

問1 傍線番号(1)「懐疑主義」とあるが、この考え方としてあてはまらないものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 絶対に確実なものは果たしてあるのかという疑問
- ② 間違ふことのない推論の存在に対する関心
- ③ 絶対に確かなものに対する批判的な姿勢
- ④ 自分の眼前の光景が確実に真であることへの疑念
- ⑤ 真ではないかもしれないという可能性の考察

問2 空欄番号

一つずつ選びマークしなさい。

(2)

・

(9)

・

(12)

に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

21 (12)

⑤ ④ ③ ② ①

主観的 局所的 心理的 社会的 徹底的

19 (2)

⑤ ④ ③ ② ①

両面性 一般性 規則性 柔軟性 安定性

20 (9)

⑤ ④ ③ ② ①

敵対関係 利害関係 依存関係 上下関係 共有関係

問3 傍線番号(3)「角を矯めて懐疑主義の牛を殺してしまわないように」とあるが、どういうことか。その説明として、最も適

切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

22

- ① 懐疑主義のポジティブな側面を強調しすぎて、かえって懐疑主義への反感を買ってしまわないようにすること
- ② 懐疑主義を素直に受け止めたからといって、それで懐疑主義を理解できたと思わないようにすること
- ③ 懐疑主義を乗り越えようとして、かえって日常生活に懐疑主義を蔓延まんえんさせてしまわないようにすること
- ④ 懐疑主義の危険な面をなくそうとして、かえって懐疑主義全体をだめにしてしまわないようにすること
- ⑤ 懐疑主義を日常生活に応用しようとして、かえって日常生活に不自由をきたしてしまわないようにすること

問4 傍線番号(4)・(5)・(7)・(8)・(15)の本文における意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びマークしなさい。

23

27

(4) レッテルをはる

23

- ① 不必要に悪し様あさまに言う
- ② 面識がない相手を批判する
- ③ 現代の言葉で表現する
- ④ 重要でないように述べる
- ⑤ 一方的に決めつける

(5) まかり通っている

24

- ① 一応の体裁をなしている
- ② 尾ひれがついて広まっている
- ③ 堂々と通用している
- ④ 意味をねじ曲げられている
- ⑤ 一部の人の間で重宝されている

(7) 吟味して

25

- ① 試しに食べてみて
- ② 念入りに調べて
- ③ それについて話し合っ
- ④ しばらくの間放置して
- ⑤ においを嗅いでみて

(15)

27

たぶらかしている

- ⑤ 疑問を持たせない
- ④ だましている
- ③ 判断力を鈍らせている
- ② 夢を見させている
- ① 操っている

(8)

26

カテゴリー

- ⑤ 条件
- ④ 総体
- ③ 同体
- ② 要素
- ① 部門

問5 傍線番号(6)・(10)・(13)・(16)・(17)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

28
32

(6)

32 センゲン

- ① 神のタクセンが下る
- ② 天然センリヨウを使う
- ③ センレツなデビューを飾る
- ④ センプウを巻き起こす
- ⑤ 余計なセンサクはしない

(10)

29 オチイ

- ① 製品にケツカンがある
- ② カンダンの差が激しい
- ③ カンダイな処置をとる
- ④ 難問にカカンに挑む
- ⑤ 阿鼻キョウカンの巷ちまと化す

(13)

30 サツカク

- ① 選手同士がコウサクする
- ② 文章をテンサクする
- ③ よい方法をモサクする
- ④ 利益をサクシユする
- ⑤ 陰でサクドウする

(16)

31 バイヨウ

- ① 鉄をヨウセツする
- ② ボンヨウな人物
- ③ キョウヨウを身につける
- ④ 候補者をヨウリツする
- ⑤ 気分がコウヨウする

(17)

32 セイミョウ

- ① 授業後はセイソウ時間だ
- ② 祭りはセイキョウだ
- ③ セイカランナーとなる
- ④ 森のヨウセイのお話
- ⑤ 代金をセイキユウする

問6 傍線番号(1)「方法的懐疑は日常生活とは別の文脈で実践される作業だった」といえるのはなぜか。最も適切なものを、次

の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 方法的懐疑は、日常生活では用いられることのない知識が真であるかどうかを問題にしているから
- ② 方法的懐疑によって日常生活が破壊されたため、歴史的に両者は切り離されてきたから
- ③ 日常生活はすべて偶然によって成立しているので、前提と結論の間に因果関係が存在しないから
- ④ 日常生活は本質的なものではないので、哲学が考察する対象とする必要はないから
- ⑤ 日常生活において、すべてを疑って確証の得られた物事だけを受け入れるということは不可能だから

問7 傍線番号(14)「より極端な可能性」とあるが、その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークし

なさい。

34

- ① 神や悪魔のような人間を越えた存在が確かに存在すると証明できるかもしれないということ
- ② 視覚や触覚に頼らずに、絶対確実に真であるかどうかを確かめることができるかもしれないということ
- ③ 夢の中でそれが確かに夢であると確かめる方法がこれから発見されるかもしれないということ
- ④ われわれの感覚や知識はすべて、真ではないのに真だと思いついて入っているかもしれないということ
- ⑤ 「紙切れ」や「リンゴ」といった言葉がなかったら、その存在が真であるとはいえないかもしれないということ

問8 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① 哲学的懐疑主義は、絶対に間違ふことのない推論に対する科学の本質的理解に貢献した
- ② デカルトは「デーモン仮説」「水槽脳仮説」を世の中に発表し、確実な真などないことを証明した
- ③ 方法的懐疑は個別に中身を点検しなくても済むような確実な知識を提供しようとした
- ④ 「信念」には前提となる別の信念があり、それを根本まで溯ったところにあるのが「主張」である
- ⑤ 伝聞で得た知識は確実に真であると言い切れないが、自分が直接見たり体験したものは確実に真である

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち、この山守がをる所なり。かしこに小童あり。ときどき来たりてあひとぶらふ。もしつれづれなる時はこれを友として遊行す。かれは十歳、これは六十、その齡ことのほかなれど、心をなぐさむることこれ同じ。或いは茅花をぬぎ、岩梨をとり、零余子をもり、芹をつむ。或いはすそわの田居にいたりて、落ち穂を拾ひて、穂組を作る。もしうらかなれば、峰によぢのぼりて、はるかにふるさとの空をのぞみ、木幡山、伏見の里、鳥羽羽束師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるにさはりなし。歩み煩ひなく、心遠くいたるときは、これより峰つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて、或いは石間にまうで、或いは石山ををがむ。もしはまた栗津の原を分けつつ、蟬歌の翁が跡をとぶらひ、田上河をわたりて、猿丸大夫が墓をたづぬ。

かへるさには、折につけつつ桜を狩り、紅葉をもとめ、わらびを折り、木の実を拾ひて、かつは仏にたてまつり、かつは家づくにす。もし夜静かなれば、窓の月に故人をしのび、猿の声に袖をうるほす。くさむらの螢は、遠く檜のかがり火にまがひ、暁の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろと鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峰の鹿の近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或いはまた埋み火をかきおこして、老いの寢覚めの友とす。おそろしき山ならねば、梟の声をあはれむにつけても山中の景気折につけて尽くる事なし。いはむや、深く思ひ深く知らむ人のためには、これにしも限るべからず。

〔『方丈記』による〕

(注1) 茅花——茅。イネ科の多年草

(注2) 岩梨——コケモモ

(注3) すそわの田居——山の麓の周囲の田んぼ

(注4) 笠取——現在の京都府宇治市にある笠取山およびその麓の村落。東に岩間寺、北に石山寺がある

(注5) 蟬歌の翁——平安時代の伝説の歌人。蟬丸

(注6) 猿丸大夫——平安時代の伝説の歌人。三十六歌仙の一人

(注7) かへるさ——帰るとき

問1 傍線番号(1)・(2)の「これ」が指す内容として、最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしな

さい。

36

・

37

(1) 「これ」

36

・(2) 「これ」

37

- ① 家人 ② 小童 ③ 筆者 ④ 蟬歌の翁 ⑤ 猿丸大夫

問2 傍線番号(3)・(7)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

38

・

39

(3) 勝地は主なければ、心をなぐさむるにさはりなし

38

- ① 景勝地に持ち主さえいなければ、その景色で心を慰めることができる
② 景勝地には持ち主も来ていないが、主の御心を慰めるのに問題はない
③ 景勝地にもし持ち主がいなければ、心を慰める感興もなかっただろうに
④ 景勝地には私の主も来ていないので、心の慰めになるようなものがない
⑤ 景勝地には持ち主がいないので、心を慰めるのにさしつかえない

(7) 世に遠ざかるほどを知る

39

① 世間からどのくらい遠ざかったのかを知る

② 来世の幸福から遠ざかったのだと知る

③ 男女の仲というものにとくなくなったと知る

④ 時代が遠く隔たってしまったと知る

⑤ 遠方の目的地にたどり着く苦労を知る

問3 傍線番号(4)・(5)・(8)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。

40

42

(4) 故人

40

① 遠くにいる友人

② 昔の友人

③ 故郷の家族

④ 月に住む伝説の人物

⑤ 亡くなった恋人

(5) 袖をうるほす

41

① 袖を振ってこたえる

② 袖をはためかせて舞う

③ 袖を引つ張って悔しがる

④ 袖を自分の涙でぬらす

⑤ 袖で耳をふさぐ

(8) おそろしき山ならねば

42

① 苦しい登山ではないので

② 物騒な山なので

③ 恐怖を感じる山でないならば

④ 山並みがそろっていないければ

⑤ 気味の悪い山ではないので

問4 傍線番号(6)・(9)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

43

44

(6) 嵐に似たり

43

- ① 名詞＋格助詞＋ナ行上一段活用動詞の連用形＋存続の助動詞
- ② 名詞＋格助詞＋ナ行変格活用動詞の連用形＋存続の助動詞
- ③ 名詞＋格助詞＋ナ行上一段活用動詞の連用形＋断定の助動詞
- ④ 名詞＋断定の助動詞＋ナ行上一段活用動詞の連用形＋断定の助動詞
- ⑤ 名詞＋断定の助動詞＋ナ行変格活用動詞の連用形＋存続の助動詞

(9) これにしも限るべからず

44

- ① 形容動詞＋副助詞＋ラ行四段活用動詞の終止形＋当然の助動詞＋打消の助動詞
- ② 代名詞＋格助詞＋副助詞＋係助詞＋ラ行四段活用動詞の終止形＋当然の助動詞＋打消の助動詞
- ③ 代名詞＋接続助詞＋副助詞＋係助詞＋ラ行四段活用動詞の終止形＋命令の助動詞＋打消の助動詞
- ④ 代名詞＋接続助詞＋副助詞＋係助詞＋ラ行変格活用動詞の終止形＋当然の助動詞＋打消の助動詞
- ⑤ 代名詞＋格助詞＋副助詞＋係助詞＋ラ行変格活用動詞の終止形＋命令の助動詞＋打消の助動詞

問5 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 筆者は山の麓にある柴で葺いた粗末な小屋に住んでいた
- ② 明るくのどかな日には山に登って遠くの地などを眺めた
- ③ いつか遠出ができたら猿丸大夫の墓を訪ねたいと思っていた
- ④ 山菜や木の実をとってはすべて仏前に供えるのが日課であった
- ⑤ 山中の趣も初めは素晴らしく思えたが次第にその単調さに飽きてきた

問6 本文の出典である『方丈記』と同時期に成立した作品を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

- ① 風姿花伝
- ② 栄花物語
- ③ 蜻蛉日記
- ④ 十六夜日記
- ⑤ 雨月物語